

三宅B遺跡 1

—三宅B遺跡第1次調査報告—

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市には先人の残した文化財が今なお地下に残されており、発掘調査によって往時の暮らしぶりを物語る資料や、大陸よりもたらされた数多くの文物が次々と発見されています。これらを次代に守り伝えていくことは現代に生きる私たちの責務ですが、ほとんどが市街地の再開発にともなって発見されることから、その保護は困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書は共同住宅建設に伴って実施した三宅B遺跡第1次調査成果について報告するものです。調査では中世後期の居館の一部と考えられる溝などを確認するとともに、中国からもたらされた陶磁器をはじめとする遺物が出土するなど、大きな成果をあげることができました。

調査に際し、地権者である中妻博太様に快いご理解と多大なるご協力を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。また、関係者のご尽力により、調査を円滑に進めることができましたことを深く感謝いたします。この報告書が幅広く活用され、文化財保護への理解を深める一助となれば幸いと考えます。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は平成18（2006）年4月10日から6月1日に福岡市教育委員会が行った、福岡市南区三宅2丁目745-11外所在の三宅B遺跡第1次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査及び整理報告書作成は、共同住宅建設に伴う民間受託事業として実施した。
3. 検出遺構には3桁の連番号を付し、遺構の性格を示す記号として、SD（溝）、SK（土坑）、SP（ピット）、SX（性格不明遺構）を頭に付した。
4. 本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武学、坂口剛毅が行った。
5. 本書に使用した遺物実測図の作製は吉武、田中克子が行った。
6. 本書に使用した図の製図は田中が行った。
7. 本書に使用した写真的撮影は吉武が行った。
8. 本書の執筆は、上器を田中が、他を吉武が行った。
9. 本書に使用した方位は全て磁北である。
10. 本書の編集は吉武が行った。
11. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理する。

遺跡調査番号	0606		遺跡略号	MYB-1	
調査地地番	南区三宅2丁目745-11外		分布地図番号	39 三宅 0139	
開発面積	987.65m ²	開発面積	387.89m ²	調査面積	448m ²
調査期間	2006年(平成18年)4月10日～6月1日				

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地点の位置	1
第二章 発掘調査の記録	3
1. 発掘調査の方法と経過	3
2. 発掘調査の概要	3
3. 主な検出遺構と出土遺物	5
(1) 溝状遺構	5
(2) 土坑	8
(3) その他の出土遺物	12
第三章 おわりに	14

插図目次

Fig.1	三宅B遺跡の周辺の遺跡（1/8,000）	2
Fig.2	調査区の位置（1/500）	2
Fig.3	遺構の配置（1/150）	4
Fig.4	溝状造構の土層と断面（1/40）	5
Fig.5	SD-001・021・020・016・010出土遺物（1/3）	7
Fig.6	上坑SK-002・003（1/40）	8
Fig.7	土坑SK-012・013・014（1/40）	10
Fig.8	上坑SK-023・024（1/40）	11
Fig.9	SK-002・003・012・013・023出土遺物（1/3）	11
Fig.10	その他の出土土器（1/3）	12
Fig.11	瓦（1/3）	13
Fig.12	石製品・鉄製品・銅線（78・79は1/2、他は1/1）	14

圖版目次

(四) 調査区東半部の作業状況(西から)

PL. 1	1. 東半部全景（西から）	2. 西半部全景（西から）
PL. 2	1. SD-001（西から）	2. SD-020・021など（西から）
PL. 3	1. SK-002（北から）	2. SK-013（南西から）
	3. SK-003（南東から）	4. SK-003（南西から）
	5. SK-012土層断面（北から）	6. SK-012完掘状況（南から）
PL. 4	1. SK-014（南東から）	2. SK-023（南西から）
	3. 出上遺物（縮尺不同）	

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会では市域内の埋蔵文化財の保護のため、包蔵地においてビル建設などの開発行為が予定された場合には、事前に試掘調査を行って地下の遺跡の状況を確認するとともに、現状保存が困難な場合には地権者等の協力を得て記録保存のための緊急発掘調査を行っている。

平成16年、福岡市南区三宅2丁目745-11外において、中妻博夫氏による共同住宅建設が計画され、福岡市教育委員会にて11月15日付で埋蔵文化財の有無についての照会があった。申請地は福岡市文化財分布地図上では三宅B遺跡に含まれ、地下に遺跡の存在する可能性があった。このため、教育委員会埋蔵文化財課では確認調査を行う必要がある旨を回答し、11月18日に対象範囲に重機により2本のトレーニングを設けて調査を実施した結果、地表下0.45~1.35mで柱穴などの遺構を確認し、弥生土器・中世土器などが出土した。確認調査の結果を踏まえ、埋蔵文化財課では申請者と協議を持ったが、予定建築物による地下の遺跡への影響は避けがたい状況にあり、申請地面積987.65m²のうち建設工事により影響を受ける387.89m²の範囲について、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成18年4月10日から6月1日まで埋蔵文化財課が民間受託事業として実施し、整理報告書作成は平成19年度に行った。

2. 調査の組織

調査委託 中妻博夫

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子（前）、山田裕嗣（現）

調査総括 埋蔵文化財第1課長 山口譲治

埋蔵文化財第1課調査係長 山崎龍雄（前）、米倉秀紀（現）

調査庶務 文化財管理課管理係 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財第1課事前審査係 久住猛雄・本田浩二郎（試掘調査・事前協議担当）

埋蔵文化財第1課調査係 吉武 学（発掘調査担当）

調査協力 坂口剛毅（技能員）、江島光子、[] 加藤常信、片岡博子、唐島栄子、川庄朋子、坂下達男、清水 明、中村尚美、布江孝子、山内 恵、山下智子、山中征生、結城フヂ子（五十音順、敬省略）

整理協力 田中克子（技能員）、青木悦子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順、敬省略）

事業主の中妻博夫様には調査についてご理解頂くとともに、多大なるご協力を賜りました。また、施工業者の照栄建設株式会社には条件整備等についてご尽力頂きました。深く感謝致します。

3. 調査地点の位置

三宅B遺跡は、福岡平野を北～北西に流れる那珂川が形成した沖積微高地に立地する。那珂川西岸には、浸食によって形成された残丘や沖積作用によって生まれた微高地がいくつも形成されており、こうした自然の高まりの上で大小規模の人々の暮らしが連続と営まれてきたことが近年の遺跡の調査によって明らかとなってきた。周辺でこれまでに発掘調査が実施された三宅廃寺推定地、野多目A～D遺跡群、大橋E遺跡などの主要遺跡の多くが、この沖積微高地に立地しており、ここからは縄文時代から近世にわたる集落や墓地などの遺構が発見されている。

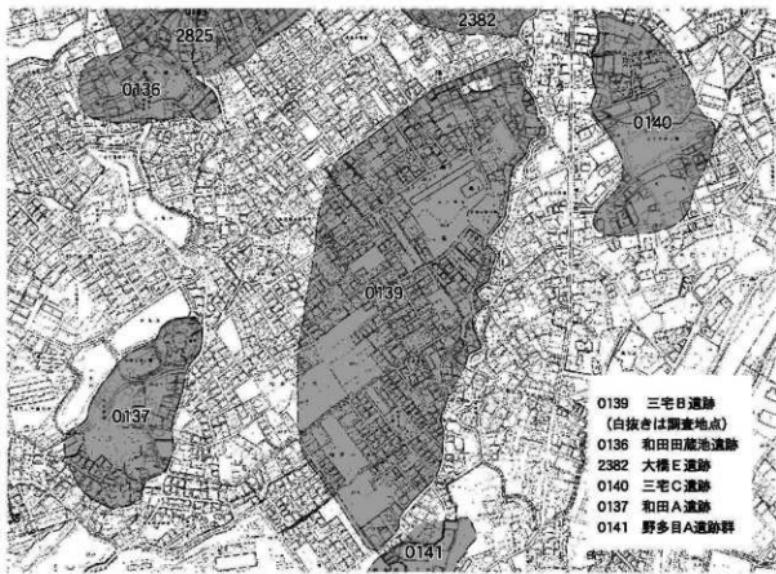


Fig.1 三宅B遺跡の周辺の遺跡 (1/8,000)



Fig.2 調査区の位置 (1/500)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

発掘調査に先立つ条件整備と事前の現地協議は事前審査係の本田が担当した。排土を場内処理するため、調査予定地を東西に二分し、まず東半部の表土を重機によって除去した。現場への進入路が狭いため作業は10トンクラスの重機で行い、4月10日から12日までの3日間を要した。4月10日に博多遺跡群第159次調査現場から機材を搬入し、13日より遺構確認作業を開始した。25日に高所作業車による全般撮影を行い、記録作成後、5月連休明けの8日～12日に重機により調査区の反転を行った。西半部の調査は15日から始め、24日に全景撮影、30日～31日に埋め戻した。そして、6月1日には撤収作業を行い、次の安野A遺跡群第17次調査現場へと移動した。調査期間中は晴天の日が多く、また施工業者である熊本建設株式会社のご協力もあって、調査は順調に進んだ。

申請地はいくつかの住宅地が集められた東西に長い不整形地をなす。うち、調査対象範囲は申請地裏寄りの部分で、予定建築物の形状に合わせて北に凸型に張り出す形状をなしている。対象範囲いっぽいを掘削し、調査区壁に勾配をとったため、上端で計測した面積が対象面積をやや上回った。調査に際しては調査区の形状に合わせて任意にグリッドを組み、遺構実測の基準線とした。また、実測に用いた海拔標高は、近隣の三宅小学校に設置してある福岡市下水道基準点から引用した。

2. 発掘調査の概要

三宅B遺跡は那珂川西岸の沖積地上に立地する。これまでに発掘調査が行われたことはなく、今回が初の調査である。調査地点はこの三宅B遺跡の北端に位置しており、すぐ東側を那珂川の支流である老司川が北に流れる。

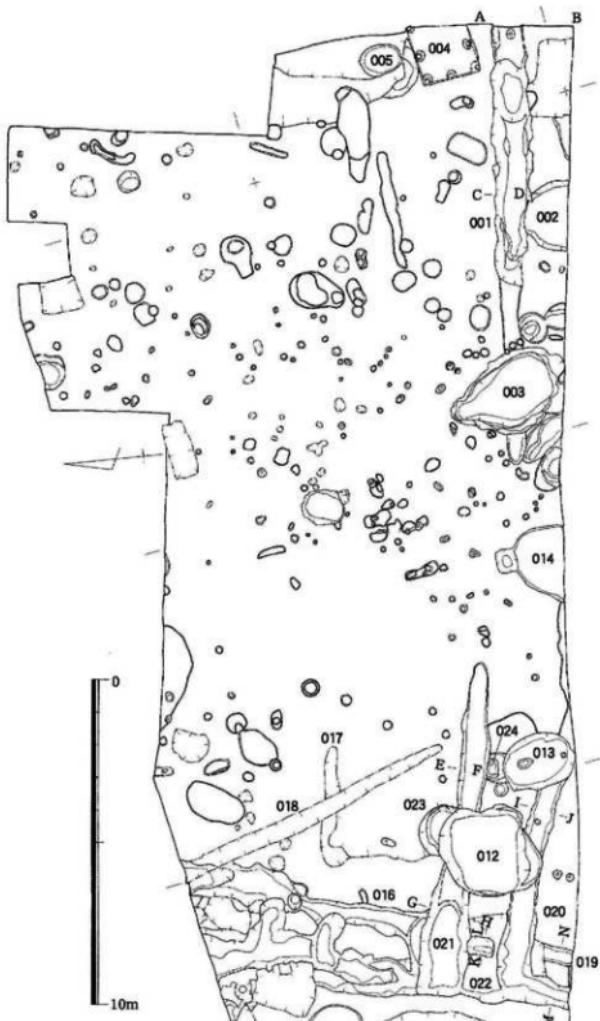
地表面の標高は11m強である。申請地の中ほどを水路が縦断しており、この水路から東に向かって基盤上が落ち込んでいくようであり、本米は段状に造成された水田であったと考えられるが、宅地造成により厚く埋め立てられたと考えられる。

基盤上は砂礫→細砂→粘質土の順に堆積した冲積層で、緩く東に傾斜する。この直上を黒色粘質土が約30cmの厚さに覆い、さらに60cmほど盛土がされて宅地となっている。遺構は黒色粘質土の上面でも確認できるが、削平により粘質土自体の残りが悪く、また期間の制約もあって、この下面まで重機で剥ぎ取り、一面のみで遺構検出を行った。段状の水田に造成された際に削られたとみられ、調査区の中央部では特に遺構の残りが悪い。また、遺構は調査区南よりの部分にのみ分布しており、北側は明確な遺構が認められない。

検出した遺構は全て中世後期のものであり、南側に方形に回り込む溝2条、この溝に沿って配置された地下式壙と思われる遺構4基、土坑3基である。以上の中世遺構のほかに、近世の土坑・近代の穴倉もしくは防空壕があり、その他は生痕と思われる小ピットや浅い溝などである。

出土遺物は極めて少なく、コンテナ2箱分である。また、中世遺構に混入して、黒曜石片、三宅庵寺出瓦と類似した叩き目の瓦片などが出土した。

南側に方形に回り込む溝は14世紀～15世紀頃の居館の外周を囲む区画溝の可能性があり、溝の北側に同時期の遺構が全く認められないことから、その中心部分は調査区の南外に存在するものと考えられる。



*一点鍾錐は擾乱
数字は遺構番号

Fig.3 遺構の配置 (1/150)

3. 主な検出遺構と出土遺物

(1) 溝状遺構

溝状遺構は東半部で1条、西半部で4条以上を確認した。うち、SD-001・021は途中が削平され連続しないが、本米一連の溝であったと考えられる。SD-020もSD-021と並行しており、関連する遺構とみられる。この順に報告する。

SD-001 Fig. 3・4、PL. 2

調査区の南東隅に検出した溝で、調査区壁沿って東西方向に直線的に伸びる。東側は残りが良いが、西端は削平により浅くなり消滅する。長さ13.5mを確認し、最大幅1.2m、最深部で65cmを測る。地山は粘質土～沖積砂で、覆土は締まりのない暗褐色土である。地下式壙SK-002・003と切り合が、SK-002とは切り合が認められず、SK-003との先後は溝が浅くなり不明である。

SD-001出土遺物 Fig. 5、PL. 4

弥生土器、須恵器、土師器小皿・坏（底部糸切り）、土節質・瓦質土器、瓦器、中国唐陶磁器（福建・広東窯白磁、越州窯・竈泉窯系青磁）、国産陶磁器（肥前系染付）、石器などが少量出土した。

1は須恵器高台付坏で、底部へラ切り。高台は低く体部境に付く。口径12.2cm。2・3は瓦質土器壢り鉢で、2は内面にハケ日を施す。3は片口で、口唇が内側に突出する。内面ハケ日、外面に指押え痕が残る。

4は北宋後半の広東窯白磁碗。5は越州窯系青磁の腰折れ碗で軸下に化粧土を施す。福建省建安窯の製品である。6は明代竈泉窯系青磁盤。7は肥前系染付碗。外面に牡丹店草文、外底に銘を入れる。

肥前系染付が混入しているが、他の遺物から14世紀頃の溝であろう。

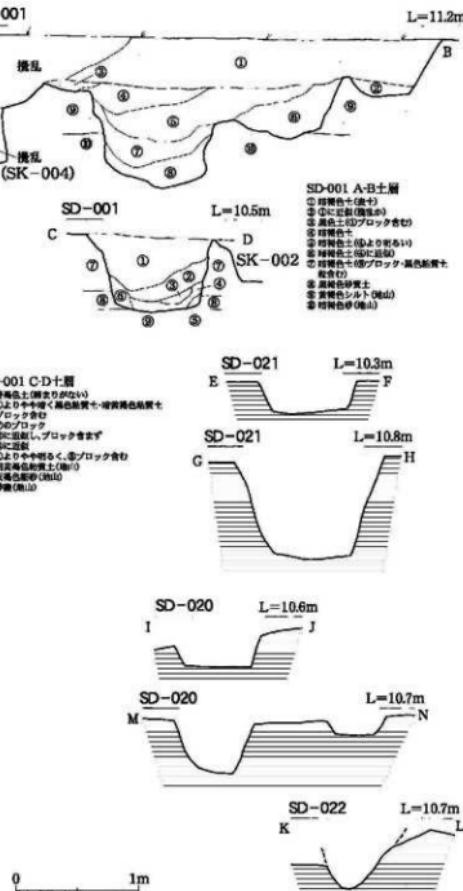


Fig.4 溝状遺構の土層と断面 (1/40)

SD-021 Fig. 3・4、PL. 2

調査区の南西隅に検出した。SD-001に連続する位置にある。東端は削平により消滅し、西端は調査区西壁の手前で立ち上がる。長10.3mを確認し、最大幅1.5m、最深部で75cmを測る。地下式壙SK-012に切られる。溝SD-022と土坑SK-024を切る。溝の覆土の堆積状況はSD-001に近似する。

SD-021出土遺物 Fig. 5

弥生上器、須恵器、上師器小皿・坏（底部糸切り）、瓦器、瓦質上器、須恵質上器、中国産陶磁器（口禿白磁、同安・竜泉窯系青磁、陶器）、瓦などが少量出土した。

8・9は弥生上器邊の底部。10は須恵器坏蓋。11は上師器小皿または坏で、底部は糸切り。12は瓦器碗で、高台は低く、内面の磨きの単位は不明確。13は東播系須恵器の鉢で、口縁上端をつまみあげ、断面三角形に肥厚させる。14は口禿白磁皿で、全面施釉後、外底の釉を雜にふきとる。15は同安窯系青磁碗で外面に櫛描文を施す。16・17は竜泉窯系青磁で、16は内面に割花文、17は外面に蓮弁文を施す。18は丸瓦で、凸面は斜格子叩きの上からヘラによるナデを加える。14世紀前半頃の造構か。

SD-020 Fig. 3・4、PL. 2

調査区南西隅に位置する。SD-021とほぼ並行しており、関連する造構か。東端は削平により浅くなり、調査区壁の巾へ消える。西端はほぼ直角に南へ山がり、調査区外へ伸びる。東西12.4m、南北2.3mを測り、最大幅0.9m、最深部分で65cm。覆土の状況はSD-021に近似している。

SD-020出土遺物 Fig. 5、PL. 4

弥生土器、古墳時代土師器、土師器小皿・坏（底部糸切り）、土師質土器、中国産陶磁器（竜泉窯系青磁）、瓦などが少量出土した。

19・20は土師器である。19は小皿と思われ、底部糸切り。20は坏で底部糸切り。21は土鍋で、内面に細かいハケ目を施し、外面に煤が付着する。22は明代竜泉窯系青磁碗で、見込みに印花文、外面に蓮弁文を施す。全面施釉後、外底の釉を輪状に搔き取る。15世紀代の造構と思われる。

SD-016・019・022 Fig. 3・4、PL. 2

SD-020・021により分断されるが、本来一連の溝であろう。北側からSD-016、SD-022、SD-019の造構番号で遺物を取り上げた。SD-016は北壁まで伸びる不整形の自然流路で、長7m。覆土は暗褐色土上で、下層で2条の細い溝に分かれる。最大幅2.6m、深さ45cm、細い溝は最大幅0.9m、深さ20cm。SD-022は土坑状をなす。長0.85m、幅0.6m、深さ20cm。覆土は暗褐色土。SD-019は北端が攪乱に切られ、南側は調査区外へ伸びる。長1.0m、幅0.5m、深さ15cm。覆土は暗褐色土である。

SD-016・019・022出土遺物 Fig. 5

SD-016からは、土師器小皿・坏（底部糸切り）、瓦器、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁・竜泉窯系青磁）、瓦、石製品、鐵製品などが少量出土した。

23は土師器小皿と思われる。底部糸切りである。24は北宋後半～南宋初めの福建産白磁碗である。口縁部上面が水平になる。SD-016は中世の造構であるが、遺物の出土量が少なく詳細は不明確である。

SD-019・022からは、上師器小皿または坏と思われる上器細片が1点ずつ出土したが、図化できない。

SD-010 Fig. 3、PL. 2

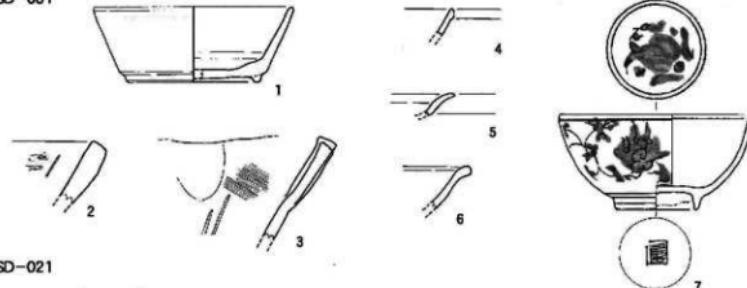
調査区の西壁際に一部を確認した。壁に向かって溝状に落ち込むが、溝である確証はない。現状で長4.2m、幅0.7m、深さ30cm。覆土は暗褐色土である。

SD-010出土遺物 Fig. 5

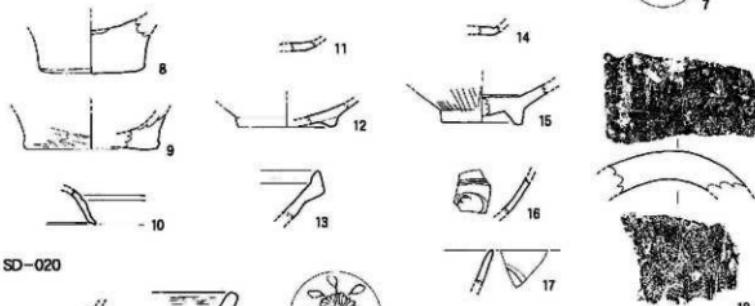
弥生土器、須恵器、土師器壺(底部糸切り)、黒色土器、土師質土器、中国産陶磁器(竜泉窯系青磁)、瓦、土製品などが少量出土した。

25は弥生土器台で、内外面ナデ調整。26は土師器小皿か壺の小片で、底部糸切り。27は土師質土器跡で、内面ハケ目調整。28は南宋龙泉窯系青磁碗で、内面に劃花文を施す。29は柱状の土製品で、断面方形を呈し、中実。11世の遺構だが、詳細時期は不明確である。

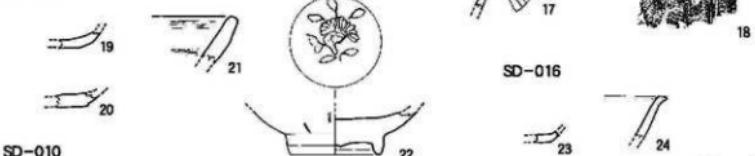
SD-001



SD-021



SD-020



SD-016



SD-010

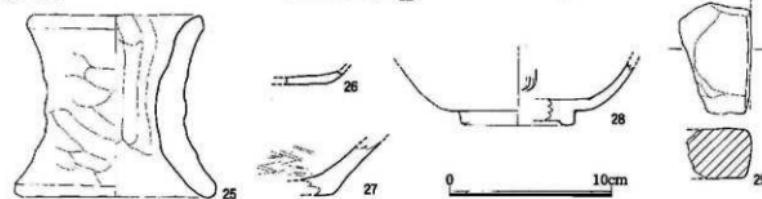


Fig.5 SD-001・021・020・016・010出土遺物 (1/3)

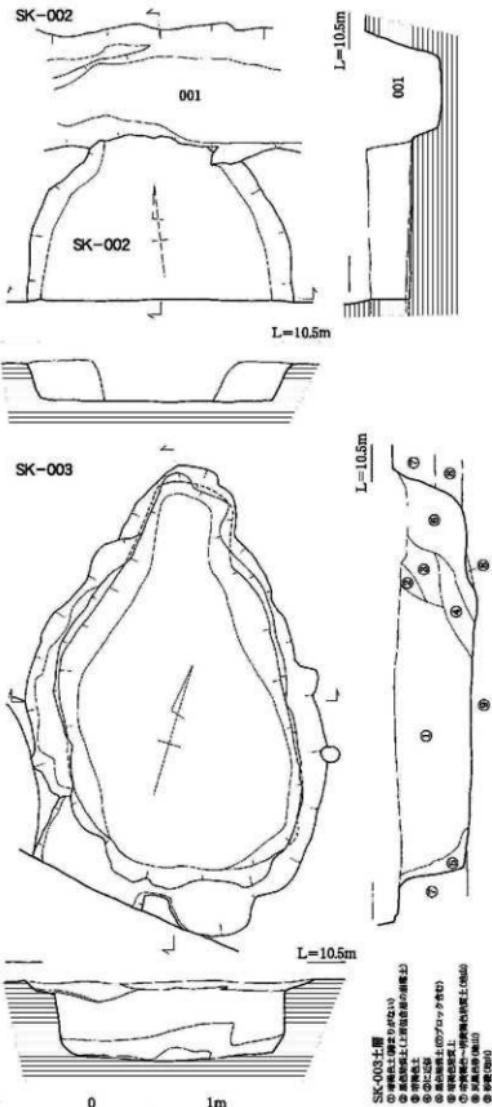
(2) 土坑

SK-002 Fig. 6, PL. 3

調査区南東隅に検出した地下式壙である。SD-001との切り合は不明で、南側は調査区外に伸展する。平面プランはほぼ円形を呈し、東西長2.2m、断面逆台形をなし、深さ30cm。底面は平坦で、接する溝SD-001の底面より20cmほど高い。

SK-002出土遺物 Fig. 9

土師器壺(底部糸切り)、土鍋片等が数点出土した。30は上師器壺で、底部糸切り。中世の遺構だが、詳細時期は不明。



SK-003 Fig. 6, PL. 3

調査区中央南端際に検出した地下式壙である。やや南北に長い楕円形プランをなし、北端に隅丸方形の川入り口を設ける。南北長3.5m、東西幅2.4mを測る。断面逆台形で、部分的に壁が直立しない抉れ気味に立つ。検出面から底面まで70cmで、入り口部分はこれより10cm弱高い。縦断土層をみると、入り口から順次埋没し、本体が一気に埋まった状況が窺える。

SK-003出土遺物 Fig. 9

弥生土器・古墳時代土師器・須恵器・上師器壺・小皿・中国産陶器(白磁)等少量が川土。

31は弥生土器の高壺か。脚部と壺部の境に刻目突帯が巡る。

32は瓦質土器片口擂鉢で、内外面にハケ目を施す。33・34は北宋後半～南宋初の福建産白磁碗。中世の遺構だが詳細時期不明。

Fig. 6 土坑SK-002・003 (1/40)

SK-012 Fig. 7、PL. 3

調査区の南西隅に位置する地下式壙である。溝SD-020・021、土坑SK-023を切るが、これらとの重複部分では焼を少し掘りすぎた。平面形はやや不整な円形を呈し、東西2.9m、南北2.6m。東辺の一部が外側に少し膨らんでおり、この部分の床面がせり上がることから入り口と思われる。壁面はほぼ直立し、東壁の入り口部は抉れ気味である。検出面から床面まで1.3mと深く、入り口部の床面は+30cmまで傾斜上昇する。上層断面は、實際から順に埋没していった状況を示している。

SK-012出土遺物 Fig. 9

弥生上器、須恵器、土師器小皿・坏（底部糸切り）、瓦器、瓦質上器、中国産陶磁器（白磁、同安窯系青磁）、高麗・朝鮮王朝陶磁、瓦、石製品などが少量出土した。

35は弥生時代前期の甕で、如意形をなす口縁の端部に板小口で刻目を施す。36は土師器壙で器壁が分厚い。37は土師器坏で底部糸切り、38は土師器の脚付鉢で、かなりの大型品である。39は瓦質上器擂鉢で、外面にハケ日を施す。40～43は中国産白磁である。40は福建産北宋後半～南宋初の碗、41は端反り碗で产地・年代等は不明である。42・43は口禿げで、42は皿、43は碗である。44は白磁皿で、陶質素地にやや灰色がかった透明釉が掛かり、見込みに刀痕が残る。朝鮮王朝陶磁とみられるが、確証はない。出土遺物より、造構の時期は中世後半と思われる。

SK-013 Fig. 7、PL. 3

SK-012の東隣に位置する十坑である。溝SD-020を切る。南北に長い楕円形プランで、長径2.3m、短径1.65mを測る。断面逆台形をなし、深さ40cmで、底面は北側に傾斜する浅皿状をなし、浅い小ピットが二つある。

SK-013出土遺物 Fig. 9

弥生上器、須恵器、土師器小皿・坏（底部糸切り）、中国産陶磁器（白磁）などが少量出土した。

45は弥生時代前期の甕の口縁部小片で、粘土の貼付により口縁外周に段を有し、外反する。外面にヘラ研磨を施す。46・47は土師器坏の小破片である。48は北宋後半～南宋初の福建産白磁碗である。中世の造構だが、遺物が少なく詳細時期は不明である。

SK-014 Fig. 7

調査区中央の南壁際に検出した地下式壙で、削平のため残りがきわめて悪い。調査区外に伸びる。円形を基調とした平面プランで、北端に隅丸方形の山入り口がある。南北長2.1m以上、東西幅2.4m。本体の深さ15cm、入り口部はそれよりやや深く30cmである。

土師器小皿・坏（底部糸切り）、瓦質土器、中国産陶磁器（南宋代竈泉窯系青磁）などが極く少量出土したが、小片のため図化できるものはない。中世の造構である。

SK-023 Fig. 8

SK-012によって大半を削り取られており、その北側に一部を検出した。円形プランの土坑で、径1.6m。円筒状に深く掘り込んでおり、底面は平坦で、深さ1.1mである。

SK-023出土遺物 Fig. 9

須恵器、土師器小皿・坏、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁、陶器）などがごく少量出土した。

49は須恵器の瓶頸か。外面は回転ヘラ削り、内面は横ナメ調整の下に叩きのあて其痕が残る。50は瓦質上器釜である。口縁部と胴部は同一個体であるが接合しない。頸部直下に沈圓線を巡らせ、半円

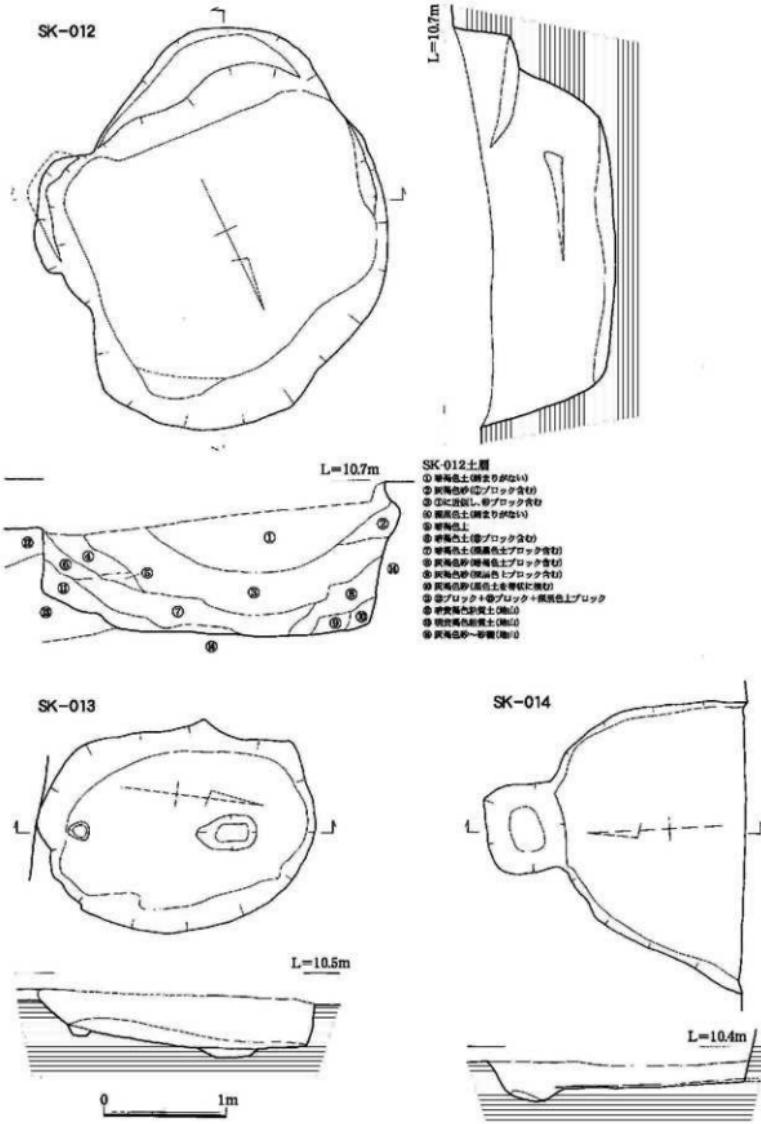


Fig.7 土坑SK-012・013・014 (1 / 40)

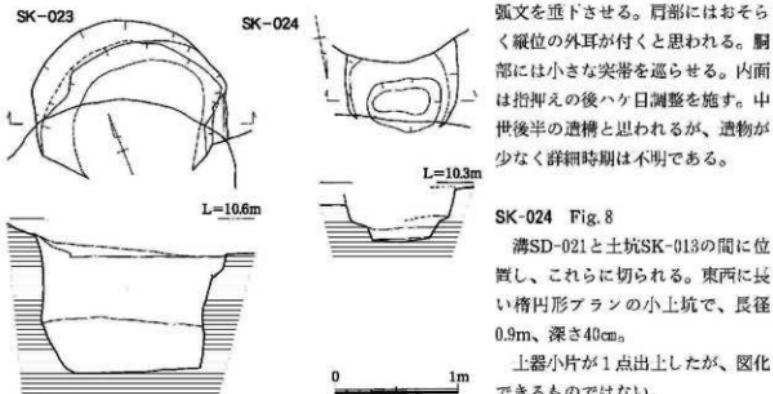


Fig.8 土坑SK-023・024 (1/40)

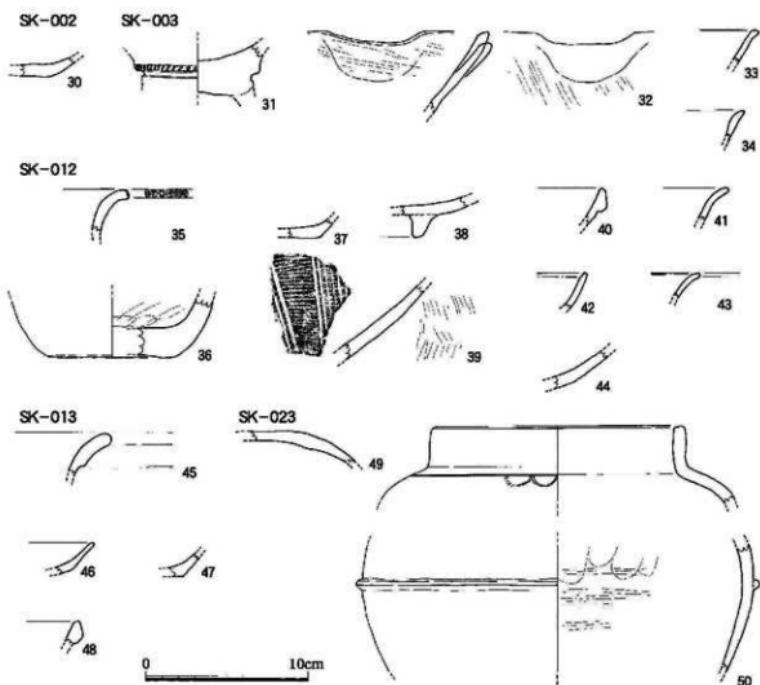


Fig.9 SK-002・003・012・013・023出土遺物 (1/3)

(3) その他の出土遺物

報告から漏れた遺構や、各遺構から出土した瓦や石製品、銅錢についてまとめて報告する。

土器 Fig.10, PL. 4

51は北宋後半～南宋初の福建産白磁碗である。52は唐津焼の描鉢で、口縁の内外に鉄釉を掛ける。1630年代～50年代の製品である。53は肥前系の黄釉陶器碗で、見込みを輪状に剥剝ぎする。54は肥前系白磁碗である。51～54は近代の防空壕跡とみられるSK-004から出土した。

55は唐津焼灰釉陶器碗である。きめの粗い陶胎素地に淡灰白色の不透明釉を掛ける。16世紀末～17世紀初頭の製品と思われる。近世以降の貯蔵穴とみられるSK-005から出土した。

56は土師器環で、口径12.2cm。57も土師器環で、底部糸切りである。中世の浅い盆みSK-011から出土した。

58は上師器杯で、底部糸切りである。擾乱坑SK-017出土である。

59は北宋後半～南宋初の福建産白磁碗である。60は明代前半の童家窯系青磁碗で、内面に陽印刻文を施す。61・62は肥前系染付けの碗である。61は1700～40年代、62は1820～60年代の製品である。63は肥前系染付けの段重で、口縁端部を剥剝ぎする。18世紀後半～19世紀前半の製品である。59～63は擾乱溝SD-018からの出土。

64は弥生時代前期の高杯であろう。器面の剥落が著しい。SP-106出土。65は上師器小皿で、口縁部と底部は同一個体だが接合しない。底部は糸切りである。SP-107出土。66は朝鮮王朝陶磁白磁碗で、胎土は陶胎である。竹節状高台で、高台内まで施釉される。調査区西半部の壁面から出土した。

瓦 Fig.11

67～70は平瓦である。67は凹面ナデ調軋か。68～70は凹面に斜格子叩き目を施す。いずれも凹面の布日は細かい。端部は面取する。67は瓦質、68・70は須恵質、69は土師質の焼成である。71～75は丸瓦である。71は凹面の叩き目が浅い斜格子で、ナデ消す。72はヘラナデして平滑で、表面が少し銀化する。73・74は摩滅が著しい。75は繩目叩きを施す。端部は面取するが、75は側面の1/3に押し割りによる破面が認められる。凹面の布日はやはり細かい。71は須恵質、72は瓦質、74・75は土師質の

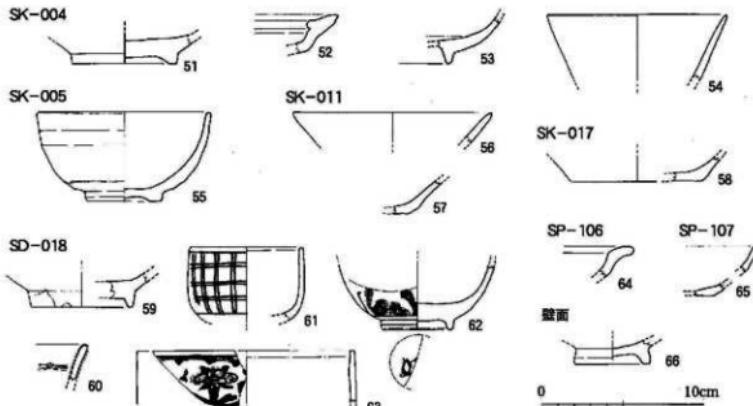


Fig.10 その他の出土土器 (1/3)

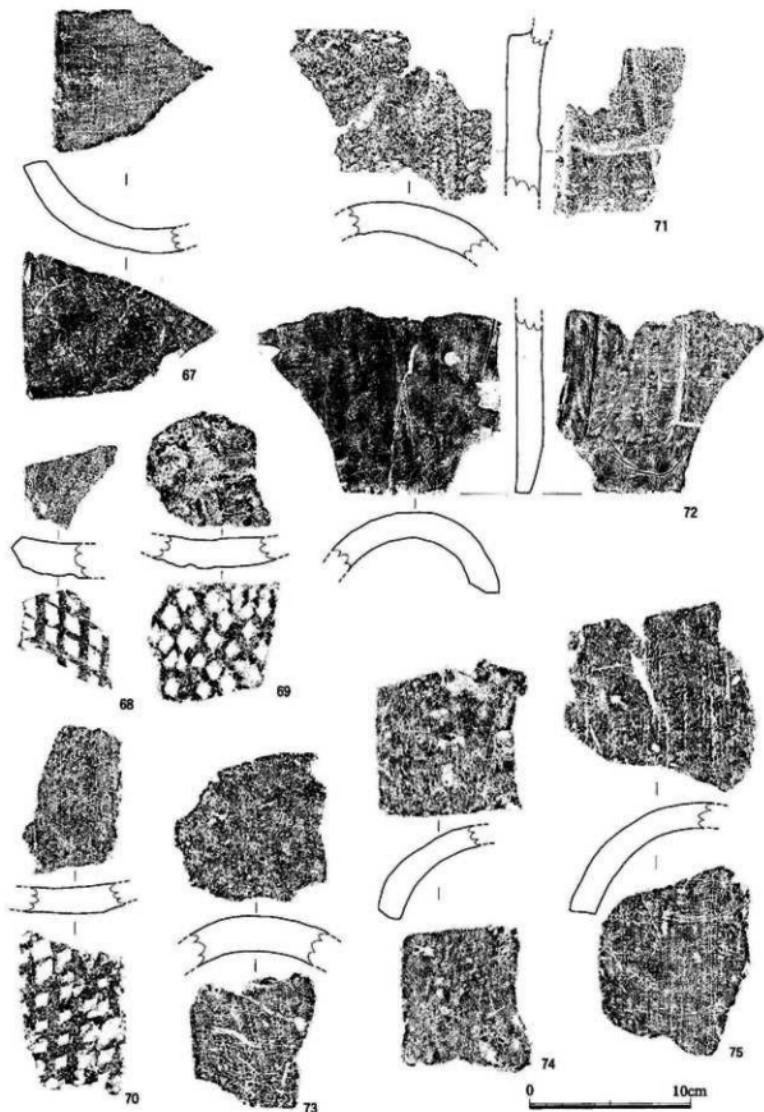


Fig.11 瓦 (1/3)

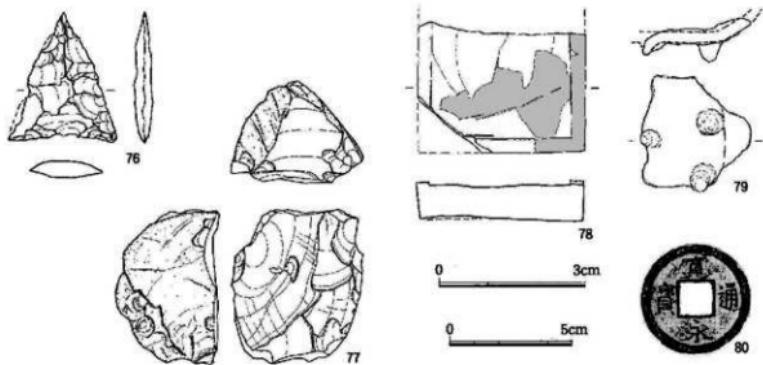


Fig.12 石製品・鉄製品・銅銭 (78・79は1/2、他は1/1)

焼成である。67・72・74はSD-001を切るビットSP-101から出土し、中世後期から近世の瓦とみられる。他は擾乱溝SD-018から出土したが、68~70の斜格子叩き日の瓦は本調査地点の北西約400mに位置する二宅庵寺推定地の発掘調査で出土した瓦の叩き文様に酷似しており、71の不鮮明な斜格子叩き日の瓦、75の輪目叩き日の瓦、更にはSD-021の18とともに古代の瓦と考えられる。

石製品・銅銭 Fig.12, PL. 4

76は打製石器で、基部の抉れは浅い。漆黒色の墨曜石製で、薄くバティナを被る。SK-007(深み)出土。77は方3cm程度の小形の石核である。正面を作業面と下方を除く三方から剥片剝離を行う。上面にのみ打面があり、他は自然面である。漆黒色の墨曜石製。SD-016出土。78は石硯で、陣部の小片。粘板岩製か。SK-012出土。石製品としては他に黒曜石チップ2点がある。

79は鉄製品である。鋸化が著しいが容器の一部とみられ、底面に円錐形の短い脚が三ヶ所付く。縁辺は全て欠けている。SD-016出土。80は銅銭「寛永通寶」で、調査区壁から出土した。

第三章 おわりに

検出した造構は14~15世紀頃と考えられる溝3条と地下式壙4基などである。これらは調査区の南半を中心に分布し、特に溝は方形に屈曲して調査区の南外へと伸びており、おそらく方形の区画溝と考えられる。このうちSD-001とSD-021は一連の溝と考えられ、その南に並行するSD-020も同時期かあるいは区画が大きく変わらない時期に相次いで掘られた溝と推定される。また、これらに切られるSD-016・022・019もまた一連の溝であり、上記区画溝に先行する区画の一部であった可能性が考えられる。これらは14~15世紀頃の古館に関連する造構の可能性が考えられるが、北半部に同時期の造構が全く認められないことから、その中心部は調査区の南外に存在するものと考えられる。これに類似する中世の造構が北隣の大橋E遺跡などでも確認されており、一带に中世後期の豪族居館に関連する造構が広く展開しているものと予想され、その実態解明が今後の課題といえよう。

出土遺物には上記造構に伴う中世後半代の遺物の他、弥生時代前期後半の土器、古墳時代後期の須恵器、中世前半代の輸入陶磁器などがあり、近隣に当該時期の遺跡が存在する可能性を示している。

図 版



調査区東半部の作業状況（西から）







1. SK-012 (北から)



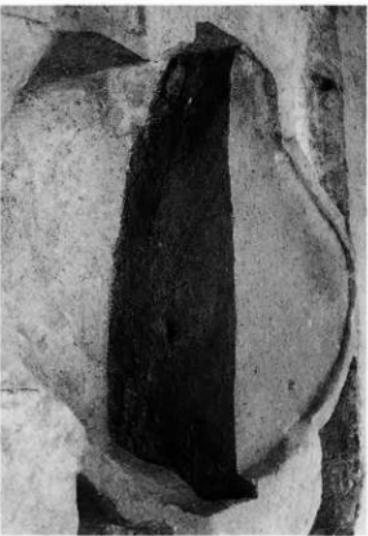
6. SK-012完掘状況 (南から)



1. SK-002 (北から)



3. SK-003 (南東から)



4. SK-003 (南西から)

5. SK-012土層断面 (北から)



1. SK-014 (南東から)



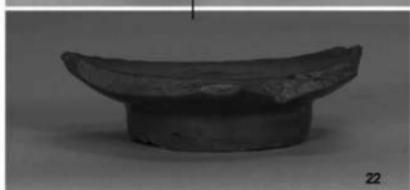
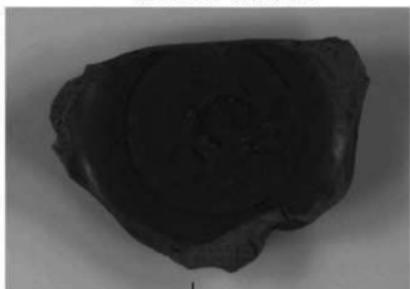
2. SK-023 (南西から)



1



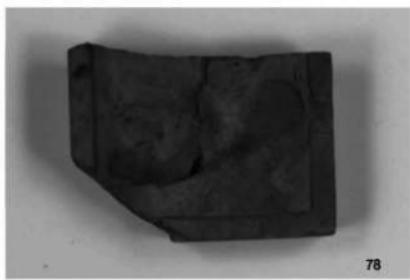
7



22



55



78

3. 出土遺物 (縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	みやけびいいせき いち みやけびいいせきだいいじちょうさほうこくー						
書名	-三宅B遺跡 1 - 三宅B遺跡第1次調査報告-						
副題名							
著者名							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1008集						
編著者名	吉武 学、田中克子						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4867						
発行年月日	西暦2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北 緯 ° / ′ / ″	東 緯 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積	調査原因
三宅B遺跡 第1次	福岡市南区三宅 2丁目745-11外	40130 0116	33° 33' 04"	130° 25' 37"	20080410 ~ 20080601	448	共同住宅建設
所収遺跡名	細別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
三宅B遺跡 第1次	集落	中世後期	溝+地下式井戸+土坑+ ピット	上部器+須恵器-陶磁器+ 土製品+鉄製品-石製品	中世後期の居館の一 部か		
		近世	土坑	回転陶磁器+瓦-削鉗			

三宅B遺跡 1

-三宅B遺跡第1次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1008集

2008年（平成20年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1-8-1
 印刷 森田印刷所
 福岡市中央区大手門2丁目1-21